

---

# 神様の準備

ペ子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様の準備

### 【コード】

N0295K

### 【作者名】

ペ子

### 【あらすじ】

神様と人間の生い立ち

地球、世界が誕生する遙か昔……記録が遡れないほど遠い時の中で既に上の世界は出来上がっていた。すべてが不安定で不規則、その中で生きるモノ達。生きるという表現は釣り合わないのかもしれない。いつ生まれいつ死ぬかなど、彼らにとつては関係なく必要のない事柄だ。形なき光は生まれては消え、消えては生まれる。輝くか消えるか、ただ二つの選択しかこの世界にはない。そう、下界の世界が誕生する前……まだこの世界に天国も地獄もなかった。植物、生き物、人間がまだ創られていなかったからだ。

一際輝きを放ちただ唯一色を持つてる光がいた。塵気楼のように歪んだ姿でしかない光達の中でその光だけはライトアップされたかのように白く輝きをもっていたのだ。

彼によって数々の星が生まれ生き物が創られていった。銀河、惑星、月、太陽、水、大気、植物、昆虫……。その光はどんな光達より頭が良く能力があった。上界にも能力の差が出始めていたのだ。創られたモノを上から見下ろす光達、下の世界が少しずつ出来上がっていく。光は世界を創ることをとても楽しんでいた。まるで一つ一つ、順序良くパズルを組み合わせるように。

「おい、またあいつが何かを創つたらしい」

「今度は何だ何だ」

多くの光が興奮し浮遊する。そして形のない眼で“それ”を見た。光達は興味深く見つめる。何だこの“カタチ”は、小刻みに動いている、音が聞こえるぞ、テレパシーを送ったが反応がない、我々とは違う“モノ”か……光が瞬きをしながら会話をしている。その動きに反するように“それ”は動いている。

その存在は未だ謎につつまれていた。書物を漁り記憶を辿り“それ”を作り出した光以外の皆が証明しようとしているのだ。これは“生”か、それとも“死”か、はたまたこの世界に生きる自分達と同じ類のものなのか……。そんな浅慮を誰もが抱きながら此処でこの存在が話柄として知れ渡っていた。しかし結局謎のまま、他の光達は未知という存在を殺し“それ”に興味を示さなくなった。

「何だソレは」

「ソレとは？」

「見たことがない“カタチ”だ」

「かつこいいだろ？」

“それ”を創り出した光、彼はもはや形を変えていた。縦長に伸びた光、そしてところどころモノクロとは違う色が混ざっている。

「面白い。左右対称に伸びた棒、上下長さが違うのもいいセンスだ」

「棒じゃない！ 腕と足だ」

「ウデ？ アシ？」

「正確に言えば四肢。先っぽに分かれているコレは指で」

「さっぱりわからぬ。お前はもう私達とは違うのか？」

「違うも何も、私達は最初から皆違ったモノだ」

「なるほど、そうきたか。それにしても、そろそろ“それ”の正体を明かしたらどうだ？」

瓶の中にある心臓は一定のリズムで鼓動していた。ドクドク……。重低音が鳴れば中に入れられた水が反応し小さな粒が浮かび上がる。夥しい光達が理解に苦しんだモノ、それは人間の核と言っても過言ではない“心臓”だった。心臓は呼吸し生きているのだ。そして奇妙なことにこの心臓には“思考”という機能が備わっていた。まだ人間としての格好を得てはいないものの、心臓はその形のまま一つの生き物として成り立っていた。

(ああ、息苦しいな。上手く息ができない)

心臓が光に訴え掛けていた。息を吸う口も鼻もなければ血の流れる道さえない。今すぐこの狭い瓶から出してくれ、この窮屈な身体をどうにかしてくれ……声にならない苦しみを感じながら動き続ける心臓。しかし、この思考を読み取れるのはこれを創った本人だけだ。興味をもった一つの光がまた瓶の中を覗きながら彼に問い掛ける。

「これは“生”か？」

「そうとも。だが、まだ完成じゃない。これからが大事だ」

彼は瓶の中で鼓動する心臓を手に持った。五本の指で強く握る。

「まだ中心しか出来上がっていなくてな」

「中心？ 中身ということか」

「まあ、源だな。ここから少しずつ“アレ”の形を創っていく」

「“ソレ”と“アレ”は別物？」

「一つの個体だが、存在自体は別で……おっと、ここから先は“アレ”が出来上がってからの楽しみだ」

光を放ち色を持ち形が違えば誰もが彼に注目した。さらに言えば彼が創り出すモノ達は極めて絶品だった。暗黒に広がる宇宙に浮かぶ球体達、間近でよく見ると凹凸があったり草木、小さな虫達が暮らしていた。青い球体には白い綿が浮かび回っている。ひんやりと冷たい水がポタポタと落ちる。また違う球体は熱をもちメラメラと燃えていた。同じ球体の形をしていてもそれぞれの特性はまた違っているのだ。

他の光達は彼を惜しみなく賞賛した。彼の真似をしてカタチを変える光達も増えていった。彼のようにになりたい……そう思う光達も多くなった。

「私も何か創ろうと思うんだが」

「どうせならもつと歪な形にしたらどうだろうか」

「あー！失敗作になってしまった！」

下界の世界は既に出来上がっていた。宇宙が存在し空間がある。

生き物がいて呼吸をしている。まだまだ途中の絵図にすぎない世界。瓶の中に入った心臓は形を変え生まれのままの姿で眠っていた。そう、その形はまさに心臓を創った光と全く同じものだった。胴体がありそこから手足が伸びる、心臓の他にも光が創った臓器が中に埋め込まれている。光にとつての最高傑作だ。

瓶の中の生き物は水の中でゆっくりと瞼を開けた。眼球が露になる、なんと美しい瞳だろうか。大きく開いた瞳は硝子玉のように光を反射している。唇から微小の泡が出る。曲げていた手足を伸ばし切り瓶の淵へと向かう。

ああ、これが生き物だ、彼は安堵した。今まで創り上げてきたモノと比べ物にならないくらいに、それは“生”を感じる。動きがあつて意思がある。同時に恐怖にも似た不思議な気分でもあつた。“自分は自分よりも優れたモノを創ってしまったのではないか”と。自分と同じ姿のはずなのに、目の前にいる生き物に畏れを感じるとは……、驚きを隠せないのも事実だ。

言葉の代わりにテレパシーを送る。言語がわからなくとも、赤子のように小さい脳だとしても理解する能力があれば伝わるものだ。

「さあ、お前に身体を与えた。脳で考え手足で形にするがいい。白紙のこの世界をその手で、その絵筆で色付けをしてくれ。お前の好きなようにこの世界を作るのだ」

生き物は応えた。硝子で仕切りられた下界、見下ろせばすぐ下に宇宙が広がっている。球体がいくつもありプカプカと浮いている風

景。生き物はしゃがみ腕を下に伸ばした。透明な膜を通り越して腕が宇宙へとぶら下がる。窓を拭くように腕を左右に動かし始めた。

「神よ、創造の準備を」

そして彼は一週間で世界を作り上げた。最古の人間、彼は“神”と呼ばれた。

「なぜあのようなモノを創ったのだ？お前が世界を創ればよかったではないか？」

「面倒なんだよ。私は下界を創るより自分の好きなモノを創る方が好きなんだな。下界のことまで頭が回らぬよ」

「無責任な奴だなお前は。あの神が世界を無事創り終わるかどうかわ保障もない」

「無責任も何も、私は好きなモノを創って下界を託しただけだぞ。誰が誰に責任を取る必要があるんだ？それとも、お前が世界を創るか？」

そう言われた光はそそくさと逃げて行ってしまった。その姿を後ろで見ながら彼は笑った。

人間のカタチをした光は人間のカタチをした神を創り上げたのだ。そして光は任務を終えたと言わんばかりに姿を晦まし、最後には消えてなくなってしまった。

「ちょっと神様、生き物のフリして寝たフリなんてしないでくださいよ」

「チツ、バレたか」

薄い脛が上がると形のある眼が露となった。部下は大量の書類を綺麗にまとめガラスケースに入った球体を興味津々に覗く。

「僕思つてたんですけど、どうして神様っていつも人間の“カタチ”をしているんですか？人間嫌いなくせに」

「嫌いじゃないぞ。好まないだけだ」

「食わず嫌いなだけでしよう。僕はドラゴンやヘビの方が強くてかっこいいと思いますけど。威圧感だつてあるし！」

「それはお前の趣味だ。人間が想像する神様っていうのは、人間のカタチをしてるんだ！」

「何でそんなことがわかるんですか？」

「そりゃあ、私がそうさせたからだ」

「げっ！　じゃあ……神様がそういうカタチをしていたから人間も同じカタチにしたつてことですか？どえらい迷惑ですね。僕が神様だったらもつとかっこよくしてあげたのに……かわいそうな人間達」部下に覆い被さるように竜巻が発生する。もちろん腹を立てた神の仕業だ。部下が悲鳴を上げながらクルクル回っている。

「真つ白で何も無い世界に色を施すには絵筆が必要だ！その筆を持つにはこの美しく伸びた腕が必要だ！そうだろ？！」

「は、はいー！」

「お前も人間になりたいかー？！」

「はいー！」

「神になりたいかー？！」

「神様にはなりたくないですー！」

激しい竜巻が一旦治まると部屋には何枚もの書類が散らばり酷い有様となった。しかし、ガラスケースに入った球体達だけは変わらず中で浮いていた。

「創生に飽いたんですか？」

「もう創るモノなんてないだろ。あ、火星に調味料かけるの忘れてた。どうりで火が弱いわけだ」

「それはそうと、もうその星はダメなんじゃないですか？変な臭い

するし」

「お前に鼻があるとはこれまた新しい発見だな」

いくつも並んだ球体の中に腐りかけたものがあつた。灰色が濁つた色合いに濃い緑をした苔がへばりついている。星を囲む水蒸気はへドロ化し重々しい液体となつてポトポトと落ちる。

「あんなに青かつたのに、面影すらないですね。どうします？壊します？」

「もつたいない。食べよう」

バリバリ、枯れた大地に突き立てるフォーク、沈む海を掬うスプーン、爛れた赤道を切るナイフ……神が球体を頼張る。

「滅亡間際の地球はとても不味いな」

「これで地球食べるの何個目ですかー？」

「いちいち覚えてられぬ。よし、もう一回作り直すか。調味料の準備もオツケーだ」

「調味料ってこれのことですか？」

部下が瓶を持ち上げる。光の粒子が中で浮遊していた。

「調味料ってただの人間じゃないですか。人間のせいで星はダメになるのにまたかけるんですか？神様のくせに学習能力ないですね」  
悲鳴が再び上がり神様の後ろで部下がクルクル回る。

透明な球体に絵筆で青を施す。緑と適当にちよんちよんと入れる。霧吹きで水を均等にかける。そして最後に息を星に向かって吹くと白い雲が誕生した。その球体を太陽の近くに置く。太陽の電源を押すとさらに輝きを増した。

「人間が世界を作り上げていくのだ。かつての私のようにな、ふふふ……」

最後に調味料を星にかけて地球の出来上がり。神よ、創造の準備

を。

(後書き)

神様⇨人間のカタチ

だから人間が想像する神は人間のカタチをしている

わからないのは私も同じ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0295k/>

---

神様の準備

2010年10月8日15時23分発行